

わたし自らのガーダシルの旅 (My Personal Gardasil Journey)

By Kristin Clulow, posted to [http:// SaneVax.org](http://SaneVax.org) on 6 July 2012



オーストラリア、NSW、ニューキャッスルよりこんにちは。

私はクリスティン・クルーローです。現在 29 歳で、ガーダシルの生存者です。もし誰かが 4 年前に、後の生活が今になるだろうと教えてくれたとしても、全く信じることは無かったでしょう。単純に言えば、私は恵まれていたのです。

ガーダシルを注射する前は、私は元気で健康でした。経営学の学位を持ち、素晴らしい仕事、素晴らしい友人に恵まれ、素晴らしい人生を送っていました。酒は飲みませんでしたし、たばこも吸いませんし、体によくはないことは何もしていませんでした。体重は 55 kg でした。スポーツを好み、いつも戸外にいました。沢山の好きなものをもっていました。

2008 年 5 月、よく世間に広められ、政府が保証したヒトパピローマウイルス(HPV)ワクチン、普通ガーダシルとして知られていますが、三回の注射のうちの、第一回目の注射をしました。子宮頸がんの予防のために、9 歳から 26 歳の女性に注射するように宣伝され推奨された、大量生産のワクチンです。わたしはかかりつけの GP (一般医) に注射されましたが、彼は利点を説明しましたが、危険性については説明しませんでした。

最初の注射から 2 週間後、カラテで転んで左足の骨を折りました。私はおてんばで、殆どケガをすることがありませんでしたから、それはちょっと不思議でした。私は 6 週間ムーンブーツをはき、松葉杖のお世話になりました。これは新しい仕事 (少し面倒なものでしたが) を始めた時期と重なりました。しかしうまくこなしました。

2008 年 8 月に第二回目の注射を受けました。ちょうど、松葉杖をやめ、左足の力が回復してきた頃でした。約 4~6 週すると、変わったことが起こり始めました。9 月のある週末、目が見えなくなりました。これは回復しました。まもなく、ヒールを履いて立てなくなりました。平衡感覚がなくなり始めました。ダンスすることも、ジャンプすることも、スキップすることも、走ることも出来なくなりました。後ろのあいた靴を履けなくなりました。歩き方はグラグラし、平衡感覚と協調運動は以前のようにではありませんでした。手書きで文字が書けなくなりました。何かをしようとすると体がピクピクし、震えるようになりました。しゃべり方が変わりはじめたように感じました。初めはすべてのことは右半身で起こりました。脳卒中になったようでした。無効と分かったワクチンを注射した GP を何度か訪ねてみましたが、すべてストレスからくるものだ、神経が圧迫されたためだ、精神異常だとまで言われました。言うまでも無いことですが、答えを求めて医者を変えました。

新しい GP に代わりましたが、彼は私の突然の変化を見てはいませんでした。何かがおかしいとわかってくれました。さらなる診断のために神経科医を紹介してくれました。いくつかの検査をして、多発性硬化症 (MS, multiple sclerosis) と診断されました。画像診断や検査には所見はありませんでしたが、体の兆候はこれを指し示していました。私は 3 日間にわたり 3 回のメチルプレドニ

ソロンの静脈注射を受けました。殆ど改善はありませんでした。2008年12月、体調が悪くなり続けたため仕事を辞め、フルタイムの小売り環境にいきました。

2009年1月に、シドニーの神経科医にセカンドオピニオンを求めました。身体的な症状の検査の後、彼は一つの質問をしました：「最近、何かワクチンの注射をしませんでしたか？」と。数名の患者さんが同じような症状で紹介されてきたことを説明しました。どの患者さんにも一つの共通の要素がありました。ガーダシルです。5日間のメチルプレドニソロンの静脈注射の治療を受けることを薦めました。この治療は少し前にやりましたが、そのころ体調はもっと悪くなっていましたから、助けになるかと考えました。だめでした。メチルプレドニソロンはステロイドです。私の神経科医は単純にのべました。それは‘火’に似ていると。体中を巡ってあらゆるものを殺し、体は作り直されると。問題は私の体は相当にノックダウンされ、戻れないのだと。次の5月間、私の体はさらに混乱していきました。失神し、幻覚ぎみになり、日常の単純なことをやるにも、もがかねばなりませんでした。眠れませんでした。いつでも具合が悪い感じがしました。フルタイムで働き、理学療法、作業療法、言語療法に出向きました。症状が左側を取り囲むように広がってきたとき、医療チームは始めからやり直してくれました。

2009年6月にPETスキャンの検査を受けました。これはMRIと処理は同じようなものですが、結果はもっと細かくわかります。このスキャンの結果は、小脳 — 運動機能をコントロールする脳の一部ですが — の機能がスイッチオフの状態であることを示していました。これは免疫グロブリン静脈注射療法の適応であることを保証していました。2009年6月まで、あたりまえにできたはずのことを、何をするにも、もがかざるを得ない状態でした。歩くのにも、もがかなければなりませんでした。バランスをとるために何かに掴まらなければなりませんでした。直線上をまっすぐに歩けません。廊下を膨らまさずには歩いて下りられませんでした。車いすに乗せられて、スキャンに運ばれて行ったのを覚えています。以前は健康で、活動的で、いつも前向きな人間にとって、これは絶対に我慢のならないものでした。今でも、思い出すと目に涙が浮かびます。話すのにも、もがいていました。数語は言えましたが、互いにつなげて文章にすることは出来ませんでした。

話したいことが分かっているにもかかわらず実際に話せないことは本当にイライラしました。全く書けませんでした。手がひどく震え、ペンが持てませんし、部屋を横切って投げることも出来ませんでした。食べるのにも、もがきました。震えて食べ物を口に持っていけず、また口がどこにあるかという知覚がなくなっていたので自分の口がわからず、ある日の朝、病院で母がトーストを食べさせてくれたのを覚えています。免疫の仕組みがなくなっていました。非常に具合が悪いので、病院のスタッフはブタインフルエンザにかかったのだろうと信じていました。神経組織もなくなっていました。神経繊維を包んでいるミエリン鞘 — 神経を包んでいるように働くものですが — が融解されたと説明されていました。白血球は混乱し、自分自身を攻撃していました。

基本的には、私は死にかけていたのです。神経科医は正直で、免疫グロブリンの静脈注射が効くかもしれないと言ってくれました。効かないかもしれません。この重大な時期に、私には2つの選択肢がありました。沈むか泳ぐか。沈むという選択肢はありません。息が続く限り泳ぐことでしょう。実際泳ぎました。

次の12ヶ月、28日ごとに入院し、免疫グロブリンの注射療法を受けました。オーストラリア赤十

字社から多大な支援を受けました、この先ずっと感謝することでしょう。免疫グロブリンの静脈注射は「平和の維持 peacekeeper」でした。それはヒトの自動的な免疫(auto-immune)であり、体を回復させるのを助けてくれました。非常に効きました。残りはあなたも届くでしょう。わたしは、集中的に理学療法、作業療法、言語療法、水療法を受けました。今後2年間は働けないだろうと言われました。

病気は急性散在性脳脊髄炎 (ADEM, Acute Disseminated Encephalomyelitis) だと考えられていました。ADEMは‘免疫が介在する脳炎’と定義されています。通常ウイルス感染のあとにおこりますが、ワクチン接種、細菌感染あるいは寄生虫感染の後、さらには自然に起こることもあります。自己免疫機序による脱髄 (demyelination) であり、多発性硬化症に似ており、多発性硬化症の周縁疾患と考えられています。単純に表現すれば、それ自体はMSの身体的表現に似ているのでありますが、しかしながら、私の経験した ADEM は私の免疫システムの一回きりの攻撃であり、進行する変性ではないと考えられます。また、MSとは違い、ミエリン鞘は再生すると考えられています。

2009年12月、私は、教育学修士(中等教育)をとるために、ニューキャッスル大学に登録しました。思い返しますと、殆ど歩けず、書けず、話せないのですから、みんなは私のことを正気でないと考えていたことは確かでしょう。私にとって、教職はずっと考えてきたことの一つですが、全く実行でずいまして、2年間仕事から離れるので、それを実行する最良の機会だと考えました。さらに、心をずっと忙しくすることができます。私は受け入れられ、2010年2月から、フルタイムの勉強が始まりました。

引続く2年間は理学療法、リハビリ、運動ジム、勉強、診察の予約などなどで、もっとも一杯にしました。毎日を目一杯に埋め、私の体を目一杯頑張らせました。結果が物語ります。2011年12月のPETは私の小脳が生き返ったことを示していました。これは奇跡でした。小脳のスイッチが切られたとき、死んで萎縮します。私の場合はそうではありませんでした。

私はいま高校の教師です。私は本当に仕事を愛していますし、生徒は素晴らしいです。私にはとっても素晴らしい家族と友達があり、いつも私のそばにいる素晴らしい神がいます。それがなければ、今まさに、私が誰で、どこにいるのかわからなくなります。おなじ境遇にいる少女や家族を助けられる地位いる私は、とても幸福だと思っています。

この経験は、疑いなく、私が何者であるか、ということを変えました。私を、人生における素晴らしい事柄がわかり、つまらないことは心配しない人間に変えました。幸福に、前向きに、常に笑って、楽しみを持つようにと教えられました。うそをつきません、それは人生でもっとも厳しい時間でしたが、しかし最も見返りも大きいものでした。わたしはずっとひどい体の痛みで苛まれてきましたし、まだその日その日、痛みのなかで生きているのです。毎日、自分で体を急いでいくようなものですが、それは痛く、イライラさせられます。状況を理解してもらえないために、私に浴びせられる追及や咎めをこなしていくことは、私の皮膚を厚くし、不治の病を抱えて生きている人たちへの大いなる感情移入となるのみです。精神的および感情的な混乱というものは超現実的で、体の内部に害をなす薬や全体にわたる状況の不安定により千倍も悪くされます。私はすぐさま、前向きな生活と毎日を目一杯生きることがもっとも良いことだと学びました。わたしは100%回復しないでしょう。でもじたばたしません。ずっと学び続けるものをもらったのです。

この病気で苦しんでいるすべての女性へ、私はここにいます。諦めないで。病気に打ち負かされな
いで。あなたが強くあらねばと思わないと、自分がどんなに強い人なのか知らないのです。毎日祝
福されているのです。小さくとも信仰を持ちましょう。

時間の制約のためここに示すことできない沢山の情報があります。もっと情報、アドバイス、助け
てくれる他の人たちとコンタクトを取りたいときには、victims@sanevax.org の SaneVac チーム経
由で、あるいはフェイスブック(Kristn Clulow)経由で連絡してください。